

集団自決で生き残った七人の小学生

北海道 岩崎 スミ

私の家は、北海道に広い田畑と山林を残したまま、

北海道農法を指導する実験農家として、昭和十五年の春、父母兄弟が渡満し、東安省鶏寧県哈達河開拓団北海道農法実験場に入植いたしました。入植した土地は大変に肥沃で、無肥料無農薬で見事な農産物が収穫されましたが、駅にも学校にも病院にも三里以上離れ、怖ろしい狼が出没するので常にマツチを持って歩きました。

私は学校があつたので、家族より一年遅れ昭和十六年の春渡満し、四月から哈達河在滿国民学校訓導として、若い情熱のありつたけを集中して勤務いたしました。

お国のためとは思っても、雨降れば忽ち泥濘と化する

道路は靴を手に持ち、素足で歩かねば靴は泥にとられるのでした。又広い屋敷に、たくさん果樹園にと、誠に恵まれた生活をさせて頂いて育った私には、小さい粗末な家に電気もなく、水も悪く、店もないあまりの生活の激変でしたから驚きましたが、戦場の兵隊さんを思い皆誰一人不平不満を唱えることもなく、心を一つにして頑張りました。

学校は、通学距離が遠いので寄宿舎に小学一年生から入りました、月曜に登校して土曜に集団で下校します。生徒と先生は、親と子のようになやそれ以上に密接な間柄になりました。早朝に起きて生徒の食事を作ることから、夜入浴させてから就寝させ、夜中に寝小便の子を起して便所につれてゆき、学校の授業が始まる前に、失敗して寝小便をしてしまった布団の洗濯がある。大阪府出身の高田成章先生が、当時校長でした。が先生は、何事も率先垂範であり、スパルタ教育でもありました。鉄は熱いうちに打てというご方針で、幼いうちから親元を離れて学ぶ生徒を誠心誠意愛の権化となつて教育なさいました。

四十人余りの寝小便の子を起しては、便所へ連れてゆくばかりでなく、布団にご自分の鼻をすりよせ、尿がきれいに洗えているか否かを点検するのでした。教材研究は電燈がないので、皿に油を入れその中に布を入れて灯火とするので、毎晩鼻の穴は真黒けになり若くて何もわからぬ私でしたが、校長の後姿に教えられ、大勢の生徒をおあずかりして教壇に立つだけの教師では間に合わぬのだと悟りました。家庭でのご両親の役目を全部こなさなければなりません。全く緩みない緊張の毎日でした。熱血の教育者であった校長先生を、先生方はじめ生徒も深く尊敬し、感動し、極めて良い感化を受けたのでした。

又新潟県出身の吉田末吉先生は、自給自足のため学校に乳牛も飼い、ご自分で搾った搾りたての牛乳を、寄宿生全員に飲ませ、舎監の仕事と教師の勤めを見事に果たし、毎日早朝から深夜迄「一切合切の苦勞な仕事は全部僕にさせて下さい。」というふうにな生徒のために東奔西走なさっていました。

この高田校長や、吉田先生のような教師が今の日本

にいらっしやるでしょうか、私は素晴らしい先生の下で勤めさせて頂きました。

高田校長が転勤になりました後も、戦時下とも思えぬ静かな中で骨身を惜しまずひたすら教育の仕事に進していました。

昭和二十年八月六日、校長の命により私一人東安省東安市の女学校に音楽の勉強に四泊五日の予定で行かされました。私は往復六里を歩いて、母親の家に宿泊に入用な毛布を貰いに行きました。

「この風雲急なる時に、女一人を更に国境に近い東安に出張させるというの!!」

といって母は心配しつつ、も二枚続きの純毛の毛布を手渡してくれました。暑さのために南瓜も西瓜も葉っぱが死んだように地面にはりついていました。母のかぶせてくれた白い帽子を打ち振りながら、遠い丘の上の道に消える迄、母も私も幾度も手を帽子を振り合い悲しい気持ちでした、そしてこれが今世での母と私の互いの見納めとなりました。

東安の女学校には、東安省全体から女教師が集まっ

ていました。音楽の勉強かと思つたのに、無線や手旗信号の練習ばかりで、やっと今日は家に帰れるという朝でした。キーンという音で見たこともない飛行機が飛ぶのです。それは八月九日の朝でした。日ソ不可侵条約を破棄してソ連が進攻して来たのだとも思わず、友軍の飛行機かと空を見ていると爆弾が落され鉄橋はこわされ、家に帰れないという情報が入りました。それと同時に私に

「今ここにいる、女学生五十人と、学校の職員家族皆を、ハルピンの桃山小学校迄安全に避難させて下さい。」

という校長命令だということです。

直ちに東安駅にゆきましたが、列車はない、母の住む近くの鉄橋が、爆破されたのだから親から遠く離れて来ている娘のことを、どんなに案じているだろう、言葉もわからぬ異国の地を、どの方角に行けばよいかわからない、しかし歩いてでも母の所に帰りたい、私は家族の心中を思いとてもあせりました。

「男は全員残つて敵と戦う、婦女子と老人は鉄橋復

旧次第、避難列車で全員避難して日本に帰れるように出来るだけ南方にさがれ!!」

そういう命令が上からきました。

「女は手榴弾運びをせよ」

突然日本兵の命令もきました。

真暗闇の東安駅で、戦争で死にたくない、どんなことがあつたつて、私を待ちわびている母の所に帰りたい一心で、手榴弾を握りしめていた時でした列車が来たのです。

「気をつけて早く乗りなさい、そしてなるべく早く、日本に辿り着きなさい。」

兵隊の声を聞きながら、有蓋貨車に乗ると目の前の東安駅は、火の海であります、人の上に人が乗る騒ぎです。

「赤ちゃんがつぶれるう」

という悲鳴を聞いても、一人でも多く乗らねばなりません。私の上に子供が乗っている混雑の中、そつと見ると虎林、虎頭の奥地から乗った人々は覆巻姿のままでした。

やがて明るくなって永安を過ぎて、哈達河です、私は友人に事情を話して、桃山小学校迄私の代りに引率することをお願いして、皆に別れて汽車から飛びおりました。と同時に三十三機余りのソ連の飛行機が、人々を上空から銃撃しながら列車におそいかりました。運転手を銃殺し、汽車を動けなくして低空でねらい射ちするので、右往左往して逃げまどい倒れてゆきました。

有蓋貨車に穴があき、おそろしさの余り貨車の下に、いもりのようにひつついて隠れると、三十幾機で横から低空で射ってくる、仕方なく、草むらや下水の中に隠れても、一人も生かしておかんぞうとばかりに、執拗に掃射を浴びせて来るので、頭を打ち抜かれて、白い脳味噌を出し即死する人、負傷する人、骨に弾が入ったままの人と、非武装無抵抗の婦女子は、情容赦ない狙い撃ちのバラバラッバラッという貨車を打ち抜く音に、きもつ玉も凍るようでした。

飛行機が去った時でした、代りの運転手が乗り汽車が動き出す間に哈達河の婦人が貨車に飛び乗りまし

た。私の姿をみつけ

「畑先生、もう哈達河には日本人は誰もいません、夕べのうちに皆でかたまって避難しました」

といって、強い力で私を貨車に引つ張り上げて下さった。と同時に貨車は発車しました、途中で、汽車は幾度も運転手が低空で襲いかかる機銃掃射で射殺されては、代りの運転手が来る迄停まり、避難民も痛めつけられながら、林口、牡丹江へとゆくのですが、鉄道沿線には避難してゆく日本人の列が、どこ迄も、どこ迄も続いて見えました。炎暑の中を、喘ぎ喘ぎ歩いてゆく行列、あれは全部日本人だ、あの中に皆がいる、どんなに苦しいだろうと思うと、嗚咽をこらえることが出来なかつたのです。

牡丹江駅では兵隊さんが、死体を受取って下さったので、私は皆を引率して牡丹江の高等女学校の校長を頼みとして、学校に行きましたが、一行の中には臨月の婦人が三人もいましたし、幼い子供もたくさんいたので、歩かれず大変でした。牡丹江高女で一泊し、私の恩師が、二泊目は学校は危険だからといひ牡丹江神

社に逃げました。

その夜は豪雨で、着のみ着のまま一文の金もなく、大勢五十幾人かの女学生と、二十幾人かの職員家族は傘一本もなく、仕方なく母が別れの時に、私に持たせて下さった、上等の二枚続きの毛布を、皆さんの頭上に広げて傘の代りとし、篠つく雨の中で体をよせ合せて立ったまま一睡も出来なかった。腹はペコペコにすいている、これから先どのようにして、ハルピン迄辿り着こうかと考えると、緊張するばかりです。

真暗闇の空に向って、パァーッパァーッと火が燃え上がる。お母さん達は私の帰りを待って、避難しおくられているのではなからうか、牡丹江高女の黒板にきれいな字で、ポツダム宣言、日本の無条件降伏のことが、書かれていたのを考えながら、毛布をひっぱり合つて被り、ようやく夜が明けたのです。

皆のご飯は、兵隊さんに頼み、昨夕傘の代りにしていた毛布を持って行き、その中に石炭のついたスコップでご飯を入れて貰い、皆の待つ所に運ぶ時、又もソ連機の機銃掃射に会い逃げまどいました。私のズボン

は地に伏した時に夢中だったので、誰かの大便も見分ける余裕なく、ふんづけてひどく汚れ高層建築物に張り付いて、命は助かったけれど一枚のパンツの代りもなく、道に出ていた水道を見つけ、洗っては濡れたままを着て、それでも五、六人で毛布の中のご飯を運び妊婦や子供そして女学生に、握って食べさせ自分達は毛布にひつついた米粒を食べ、防空壕にかくれやうと助かりました。

その夜牡丹江駅から、ハルピン行の避難列車に乗りましたが、途中の横道河子は死臭と持ち主のいない荷物がたくさんに打ち捨てられ避難の物凄さを見たのです。列車は無蓋貨車でしたが、時々停車させられた外は、割合に無事で月夜の光の中を通過し、ハルピンでは牡丹江高女の先生方と一緒に、駅のコンクリートの上に寝て、皆で私の母から貰って来た毛布を被って休みました。その時日本の敗戦を聞き、子供を殺して自分も死んだ婦人も見たのです、又日本の若い将校達が「山にたて籠つても我等は戦う、降伏などしないぞ」

と抜刀して行かれました。

友人の女教師に、皆を桃山小学校に連れて行くことを頼み、ハルピン駅から皆と別れました。何人かが親類をたよって行くといつて、私と共に新京迄行き、私は新京の在満教務部に行き、退職金を頂き、たぐさんの食料も頂き

「女は一日も早く日本に帰り着くように」

といわれました。教務部で一泊し、私は、すぐ近くの奉天の兄の家に行くからと思ひ、私より遠くへ行かねばならない女学生達に、退職金も、食糧も皆わけてあげ身一つで、奉天行きの避難列車に乗りましたが、四時間あれば奉天に着く汽車が、実に十日かかったので、汽車は人を乗せたまま、ちよつと動いたら停車しました。気が付くと私の指は瘰癧にかかり、夜も痛くて眠れませんでした。

私の傍に座っていた紳士が、私の指の手当をし、「奥地から来たのだね、どこに行くの。」と尋ね、十日間、鉄道線路の横で拾つて来た木切れを燃やして飯盒でたいたご飯を、食べさせて下さり、いろいろと励まして

下さいました。

その紳士は、九州の恰良郡隼人町ご出身の久保利廣様と名乗られました。部下を一人連れていて、安東の方にいる日本人にお金を届けに行く途中でした、その久保様が病気になり、私が代つて買物に四平の街に出た時、黒山の人だからなので、何だろうと見た時大勢の満人に囲まれて、日本人女性の和服をたぐさんにかかえたソ連兵がいきなり飛んで来て、皮の靴で私を蹴とばしたのです。

肩からマンドリンといわれた自動小銃をぶらさげ、顔は野獣そのもの、黒い汚れた軍服は穴だらけで、その穴のいづれからも、白い綿がぶらさがっていたのです。

驚愕の余り、私は久保様の財布も、買った品物もどこに行つたかわからない、脱兎のように逃げ帰り、それからは恐ろしくて、又久保様も危険だからと守つて下さいました。奉天駅では日本人がたぐさん殺されたと聞き、汽車が徐行になった時、飛び降りるんだよと教えられ、恐ろしかったけれど、飛び降りて、それか

ら毎日のように久保様は、部下一人連れて、私の兄の勤め先を探し、東寧の方にスパイ活動に行っていた兄が帰ったとき、兄に私を無事に引渡して下さったのです。本当に私は地獄に仏様のようなお方に助けられました。久保様は、私にご自分の服を着せて男装させ、その時から翌年六月に日本に帰るまで、ずーっと男装で生活しました。

さて、私の一番心配な家族、生徒、村人達は馬車で避難し、あの執拗なソ連の機銃掃射を浴び、馬も人もたくさん殺され、日本軍も敗走するどしゃぶりの雨中、ずぶ濡れで着のまま、泥濘に足をとられながらの一睡もせぬ真暗闇の行進に、負われた赤ちゃんは泣く声もしゃがれ、胸に抱いた子は重く、その上に両手に引つ張って歩く子は空腹と足の痛さに泣き、食物は雨でふやけて腐り、どの婦女子も老人も、命からがらここまで来たが疲れ果て、ようやく辿り着いたのが八月十二日、東安省鶏寧県麻山というなだらかな丘でした。篠つく豪雨はますます激しく、子供達も力尽きたように泣き止み、雨よけに頭から被った布団も水

を通し、誰もが腹までぐしよぬれ、馬も動かさなくなりました。こんなにソ連機の機銃掃射をほしいままにしても、迎撃する日本機は一機もなかったし、辿り着く先は、みんな真赤な火の海。そんな中で満人の掠奪と暴行がしきりに起って、怪我人、死人が出て、荷物は取られ、裸にされる人も出て、ヘトヘトに疲れ切ってしまった。ふだんは無敵関東軍と唱えていた兵隊さんが、軍用自動車で追越してゆく。国境線を守るどころか、一般の日本人をおいてきぼりにして、自分達だけ逃げてゆくのです。皆は濡れた着物を乾かしながら、炊事の支度をしていた時

「前方に優勢なるソ連戦車部隊がいて、戦死者が出ている、これ以上前進は出来ない、ふくろの鼠だ」
北海道帝国大学の貝沼洋二団長は、ここからの脱出のために、ソ連戦車隊と遭遇して敗れて麻山を大きく回って脱出をはかるといふ関東軍に、どうか一小隊を団員の護衛にと頼んだがためであった。それでも団長は、団員の婦女子老人を守るため、捍むようにして頼んだといひますのに、

「我々の任務は、開拓団を護衛することではない」と冷たくつきはなして、北の山の方へ行ってしまったのです。

団長は、ご自分で偵察に行かれ、しばらくして帰ってこられたが、何もかも諦め切った青い顔色であったといひます。

「前方にはソ連の戦車隊、後方には反乱軍が迫ってくる、軍隊でさえ敗退している現在、私たちの脱出する途はほとんど断たれた、万一脱出に成功出来たとしても、皆で行動を一緒にすることは不可能と思う。自分としては、二つの方法がある、その一つは全員がばらばらになつて脱出することである、入植してから、親子のように仲よくしてきた者同志が、ばらばらになるのは、死ぬより辛いことだが、逃げられる者は逃げればよい。もう一つの方法は、生きるも死するも最後迄行動を共にすることである、いずれをとるか諸君にまかせる、意見がある人は述べてほしい。」

やがて誰からともなく貴重品類が山と積まれ、白はちまきがくばられ、白たすきを締め、子供には晴れ着

をさせる人もいて、谷から水を汲んできて別れの水杯をかわし合い、避難する時団本部からもつて来た、菓子や干パンを子供にくばり、子供はとても喜び、一時間ばかり今世での最後の饗宴をしたといひます。その時の大人達の心情はどんなだったことでしょう、頼みとする夫は生死もわからぬ戦場に在る現在、婦人達は

「生きて虜囚の辱めを受けじ」

と潔く死を決したのです。団長さんが、

「今となつては、死ぬのが最善の方法だと思ふ、沖繩の人も玉碎した、捕虜となつて辱めを受けるより、又敵の手によつて倒れたり、逃げまどつて満人達の侮りを受けるより、自決の道を選ぶのが最も手近な祖国復帰だと思ふ、自分は開拓団の責任者として女子団員と共に自決する。」

団長の指揮で、万歳が三唱され、誰の目からもともなく涙が流れ、誰もふこうとする者もなく、八月十二日、敗戦も知らぬまま午後五時頃から、愛し子をだきしめた母親たちは、何の罪咎もない、清らかな天真爛漫な大勢の子等を道づれに、黄泉路に旅立たれま

した。団長は皆の死の案内をし、一番先にご自分のピストルで倒れた。そしてそれを合図にして、硝煙はみるみる広がって、合意の殺人自決が、麻山の丘を真赤に染め、五、六時間も続けられたそうです。生きのこった子供から直接聞いたところによると、離れた所から機関銃で、ダダダダッと撃たれたと申しますが、この麻山だけで哈達河開拓団の人は四百六十三人が自決なさいました。

我等の関東軍は、敗けることがわかっていたから、家族はじめ家財道具迄日本に先に帰した人もあるというのに、それでは何故、敗けてあのような惨状になる前に、白旗をあげて、敵将に保護を求めて下さらなかつたでしょうか。開拓民は、日本の国策の下に渡満したのに、いざとなつたら、堡壘とされ悲しくも永遠の安息につかねばならなかつたのです。その麻山で四百六十三人もの自決者の屍の下から、血に染まつた傷ついた七人の小学一年生が、奇しくも生き残りました。それが終戦の年の昭和二十年に、私が担任していた一年生でございました。終戦後七人の一年生の生

存を知った私は、北京の紅十字会、日中友好手をつなぐ会等に幾度も便りをして、何とかして七人を日本の親類の下に帰国させたいと思い、さまざま方法で連絡をとり、遂に一九八〇年、孤児慰問訪中団の一人として訪中して、ハルピン迄行きました。当時は日本人はハルピンより奥への旅は許可されず、七人の生き残った孤児の中の生存者五人が、奥地からわざわざ遠くハルピン迄会いに出て下さって、当時のことを、直接如実に語り聞かせて貰えました。彼等が申しましたのは

「全員が、目かくしの布をくばられた頃は、もう真赤な夕陽が、部落毎にかたまつて端座している白はちまき白たすきの死出の装束の人々を、美しい夕日の色に染めていた、自分は、そつと白はちまきを手でずらしてみたら、そこには三丁の黒い機関銃の銃口が、皆の方にむけられていた、私気がついて目を覚ました時、そこにみたものは、ごちゃごちゃに入り乱れて横たわっている無数の死体でした、私は血の海から這い出して大声でお母さん、お母さんと、呼びわめきまし

たが、母も姉も妹も皆此の世の人ではなかつたのです、私の腕に今も猶、その時の弾のあとがあります。これらのすべては日本人がやったことです、私は目撃者です、いやまだ外に中国人の張学生もみています。その後中国の人が、その丘の斜面に、なんの罪咎ない人を、といつて埋めたのですが、毎晩死体は火の玉となつて飛び、恐ろしかったのです。七人は心も動転してしまい、昼は誰か人の気配を感じれば、生きていたら殺されると思ひ、毛布や上衣を被つて死んだふりをし、夜になると冷たくなつた母の体にとりすがつて泣きあかし、三日三晩死体のそばで飲まず食わずでしたが、死にそこねている人が、水、水と求めれば、幼いながらも谷へおりて水をさがして与えました。

先生、私たちの仲よしだった男の子達が

「僕は死にたくないっ」と、叫んで逃げるのを、背後から射たれました。又、お父さん僕をつれていつて頼んでいるのに射たれたのです。その後、そこを通りかかつたソ連兵に、発見され恐ろしくて震えていました。ソ連兵は、日本人の

馬車を持って来て、一人ずつ衿首をつかんで、つまみ上げ馬車に子供を乗せました。

丁度そこへ、日本人の品物を盗みに来ていた張学生に、三人のソ連兵が

「連れて行け」

と命じたのです。青竜の部落迄連れて行つた張学生は、大声でふれて歩いたのです。

「おい皆、日本人の子供はいらないか、いらぬか、男も、女も、いるぞお」

たくさんの方が集まつてきて、それぞれ引きとられて養育されたのですが、その時の子供の姿は、どの子どもどの子も、どこが本當の傷のある所かもわかりかねるほど傷もつき血に染っていました。そんな姿の親なし子を温かく拾い育てて下さつた人は、決してお金があつたり、物があつたり、生活が豊かであつたからではありません、どの家もどの家も、非常に貧しくて草屋根の泥壁がはがれ落ちた家ばかりでした。しかも食事は一日一食で、その一食も高粱がどんぶりの中でおよいでいる状態の、お粥を啜る状態でしたし、誰一人

靴もなく、孤児になった七人の子等は毎日素足で、馬や豚や鶏の世話をして、家に入れば、唐さびの黄色い粉で主食を作り、皆の洗濯をしに川へゆき、何とかして、養父母となってくれた人の気に入るようにと努めたのだそうです。ある秋の日、大風が吹いて、その泥の家はドターンと一ぺんに倒れてしまいました。そのような困窮の生活の中にあっても、心はまことに豊かで孤児となってしまった子を、ふびんに思い養育して下さった偉大な中国人は、命の恩人であり、慈悲の心です。これこそ、人間が人間としての一番本質的に大切な、心ではないでしょうか。恵まれた生活の中にあつては得がたい、人間として一番大切なものを裸で放り出された大陸で、敗戦によって中国人の温かい人間性が、教えて下さいました。

麻山に、自分の子供が生き残り育てられていることを、風のたよりに知った父親広尾郡広尾町の高橋秀雄氏は、病軀をこらえ苦心して満人の姿にばけて満人になりすまし、我が子にとたくさんの土産を工面して、はるばるハルピンから虎林線の青竜迄、子供を引き取

りたくて迎えに行つたのですが、幸子、正子の姉妹は父が日本人であるから、日本人は人を殺すから恐ろしい。辛くとも、中国の養父母の許にいた方が安全だからと、幼心に麻山の惨劇を忘れることが出来ず、一回目も、二回目も、父親について帰らずそれでも実の父は、三回目に迎えにゆき、帰らないといって地面に爪を立てて嫌がる妹の方と、姉の方は、帰るといえば養父母が泣き、帰らぬといえば実の父が泣くし、養母の背にかくれて、どうしたらよいかと毛布を被り泣いたと言っていました。

そして三度目のお迎えに養父母の方も本人の幸福を思つて、日本に帰国させてくれたのでした。思えば、守つて下さると信じて疑わなかった、日本人の男性から射られたのですから、子供の目から見た集団自決の現場の凄惨は、とても理解出来るものではないのです。誰も信じられない魂の驚愕です。

男の子は二人生き残つたのですが一人は、北海道の実験農場の子で、佐々木と申しましたが病で死亡し、猛夫さん一人が元気で生存していました。彼は麻山で

助けられてより、草の小さな小屋にかくまわれ、洗面器一杯のご飯を食べさせて貰い、日本人刈りが行われ子供でも日本人であれば殺された時には、

「いやこれは中国人だ」

と言いつつ九年間も教育して下さった由。

又日本人を拾い育てている事実をくらすために、住所を変更して歩いて、孤児を守ってくれたと聞かされました。女の子は、日本人刈りのたびに畑の土を掘って、その中に箱を入れてありその箱の中にかくしてくれて、上には草の生えた土がのせられて部落中がかわいそうだとかくまい通してくれた。

それにしても、中国は被害者であったのにもかかわらず、加害者の国の子供達を助けて下さったのです。

もう一人、私と同じ北海道の実験農場に入植した、瀧沢慶喜さんの長女麗子さんもこの七人の中の一人として、生き残りました。麗子さんは、中国の養父母のことは辛くて一言も申しませんでした。唯、私は一日も学校に行かせて貰えなかったの、とだけ涙ぐんで申しました。痩せ細り、老けてしまい真黒に日焼けして

いました。実験場の場長の長女に生れながら戦争によって茨の道を歩み続けねばならなかったのです。

池野篤子さんも、七人の生き残りの中の一人でした。敗戦によって日本に復員した父親が、自費で篤子さんに会いにゆき、遂に父親は再婚相手の女性と離婚までして、中国で苦勞している自分の娘を日本に引き取りました。馬場周子さんは、小学一年生の時ならった歌を覚えていましたし、集まった孤児は、私に涙を流して、君が代を歌ってきかせました。口ぐちに孤児達が私に訴えたことは麻山の集団自決の時のことでした。体のあちこちに弾のあとや刀のきり傷のあとを示して、私に訴えて来るのでした。終戦後三十五年振りの孤児慰問の訪中は、涙で目も腐ったのではないかと思うほど痛み、心も晴れませんでした、それは侵略の怒りを忘れぬ中国の人々が、

「犠牲者は我々の方だ」

と日本軍統治時代の残虐行為を永久に忘れないために、絵、写真、模型等によって展示し、博物館にしっかりと残されているのを見て、ああ、自分達は間違っ

ていた、と心から中国の人々に謝罪の涙が流れたので
す。

自分が、親兄弟を戦争で失ったと同じ悲嘆を、罪なき人々に日本は与えてきているのです、群衆の中に、私達に向かつて怨みの眼が光っているのを感じないではいられませんでした。

ハルビンでも、長春でも吉林、瀋陽（奉天）でも、人民政府を表敬訪問した時、穴があつたら入りたい思いをたびたびしましたのです。それは、

「日本政府が、腰を上げて、残留日本人孤児問題に乗り出せば、短日時に全孤児の洗い出しも出来るが、日本政府は、三十五年経ても、何もいうて来ない、それは終戦後すぐに手を打たなかつた我々にも、責任はあるが誠に日本は、不道徳ではないか。」

という旨のお話がありました。皆が老齡化して肉親を探し出す手だてがなくなつてしまう頃から、やつと腰を少しあげた政府なのです。集まつた残留孤児が口を揃えて言つたのは、

「東洋の鬼の子」と言つていじめられ仲間はずれに

されたとのことでした。侵略の刑罰を子供達迄が、大人に代つて受けたのだと思います。警戒され就職でも落されるのです（パイロット）

話は終戦の時に戻ります。

私の母は私の帰宅を待ち、一番遅くに村を出たそうです、馬車は兄が御し母と兄嫁と、隣家の女の子二人乗せていたが、北海道から連れて行つた馬の足は早くて強く、麻山に行く迄には先頭の方になつていたので、兄のいた所は八面通から麻山に出て来たソ連の戦車隊と、交戦となり兄は負傷していたのを見ている人が、帰つてきております。

母は私の嫁入りのために用意した物等を持って避難してくれたのでした、最後の時が近づく時隣家の横関さんや外の人達に

「これがスミ子の着物です—

と一枚一枚とひろげて皆にみせ、次々と川へ流して行つたのです。和裁の専門学校に通わしてくれた母は、教材を揃える時にいつも身分不相応と思われる上等品を求めた人でした。自分も又幼い時から丸亀藩

士の娘として、絹に包まれて育ち又私共大勢の子供にも、大変よい母でありました。

縫うばかりで一度も手を通さない、美しい着物を、行方知れずとなった娘を案じながら一枚、一枚、河に流してゆく母の心を思い、生きて帰った人の口から、このことを聞き、あの動乱のさ中にも、自分の物は一切捨て、娘の物を優先させてくれる親の有り難さに感涙がこぼれるのです。

奉天（今の瀋陽）に久保利廣様に助けられて着き、兄の家に着いた夜のことでした。

兄は銃とバリカンで、私の黒く長い頭髪を全部刈りとってくれたのです、私の甥が

「お姉ちゃんの髪を切つては駄目駄目」

と言つて、泣きながら兄と私の周囲をまわつていました。男装しなければ、恐ろしいソ連兵に連行され、強姦されて出血多量で死ぬ、そういう例をたくさん耳にしていたのですが、さすが女の命より大事と言われる黒髪を切り落された時も涙も出なかつたのです。

九月に入つて電柱に、教員の募集がはつてあります

たので、早速学校に勤め出しました。

奉天の陵南在満国民学校でした、教科書も自分達でガリ板で印刷する仕事からはじめました。月給は八百円でした、次第に物価が高騰して、米一升が百円にもなり一日二食それも、芋人参、菜っ葉、大根の方が米粒よりも多いくらいのお雑炊でしたから、勿論昼の弁当は望むべくもなく、そんな中で普通の授業を続けるので、雪の上で体操したりすると空腹で胸が悪くなつたりしました。そんな時に限つて、お腹すくだらうとばかりに、満人が、ターピンズマントーオオと声高く売りに来ます、安いもので栄養もあるのにその安いマントーを一つ買う金がないのです、ある日義姉にこのことを話して僅かの金を貰つて、たつた一個のターピンズマントーを手に入れ、職員室で八つにわけて食べました。又インキもなく紙もなく、私は兄から貰つて皆でわけて使つたのです。苦しさも、悲しさも皆でわけ合い、助け合つたその時の同僚が私の生涯の友となりました。北海道が連続三年大凶作が続いた時、全国各地に引揚げた友人からの大きな援助があつて助けら

れたのです。

学校は進駐して来る八路軍のため、又蒋介石軍のために、次々と接收され、遂に私達は戸外の立木に黒板をさげて授業したのです。

子供は机の代わりに、肩からガパンをさげその上で読み書きをしたのです、唯、戸外なので日本人の子を遠巻きにして、中国人の子供と一緒に授業をみて、笑ったり、手をたたいたりしていましたが、自分達の学校がまだ閉鎖されているからでしょうか、憎々しげな顔で棒を持ち、生徒の下校を待っていて帰り道を襲う者もいて、時には家迄見送らねばなりませんでした。又私に向つてベツと唾をかけて通る満人もいました。

憎々しげに授業を見ていた満人の子等が、

「日本鬼子 東洋鬼子負けたんだぞー早く 早く

皆 日本に帰れ 帰れ 帰れ 帰れ」

と、中国語で怒鳴るように囀り立てました。

その頃どこを歩いても、黒髪のある女性は殆ど見当りませんでした。頭を坊主にした母親が、きれいなネンネコに赤子を入れ、おんぶして歩いています。とて

も妙な姿でした。

ある日、米軍の将校が私共女教師を並べて写真を撮りました。

「世界の輿論に訴えるためだ」

と言いました。野獸の群れのようなソ連兵の蛮行故に、血の純潔を守るため、日本女性すべて黒髪を惜しげもなく切断したのです。

生徒がある日質問しました。

「先生、どうして家のお母ちゃんも、姉ちゃんも、先生も、皆、きれいな髪を切つてしまつて灰なんかつけて汚くしているの」

と、男装した上に戦闘帽を被り、ゲートルをまき真夏だというのに晒一反を胸に巻き、道で身体検査という時がきて上衣の上からさわられても乳房がわからないようにかたくまき、モンペは何枚も重ねてはき、手袋をつけている女教師に、無邪気な子供たちは、不思議を尋ねるのでした。又そのように苦労して男装していても、女と感ずかれて捕まりそうになつたこともあり、又元の哈達河の生徒に偶然町で会つた時にも

「畑先生、僕伊豆野護です。」

と、子供に見破られてしまうのです。

女の独り歩きは出来ないし夜になると

「女を出せ」

と、ソ連兵が銃をつきつけて現われて、女探しをするので、男の人達は女性を守るために、毎晩秋の寒いの

に、戸外に立ちつくして不寝番をして下さいました。

私の住んでいた家は奉天の昌盛街で、旧日本の陸軍の

将校官舎でありました。戸外の不寝番と、家の中の女

性との間には合言葉があつて、桜と言われればどこに

逃げる、山と言われれば東のどこにという風に、逃げ

道とその先の安全な場所が確保されていました。

毎晩のように逃げるので、逃げる方も上手になつて

いたのでしたが、ある晩私の逃げた方向から、ソ連の

将校が、電燈の光で私を発見して大男が追つかけて来

たのです。咄嗟の判断で黒い服だから暗闇ばかり目が

けて逃げまわり、遂に相手を煙にまいて、大きな石炭

箱の中に飛び込み、しつかり戸を押していました。少

したつて、大男はカッカカッカと皮靴の音を立て遠ざ

かつて行ったのですが、義姉は、私がきつと連れていかれたと思ひ泣き声で「スミちゃあん スミちゃあん」

と叫び探しに来てくれたのですが、余りに一心不乱に

走つたので、足と腰とがはずれたのか、立つことも動

くことも出来ず、義姉がおんぶしてやつと家に帰りま

した。この時私は親に感謝しました、脱兎の如く逃げ

まくることの出来る強い体に育てて下さつた親に心か

ら有り難うといたしました。冬はスキーにスケートと、

夏から秋には山で友人と兎を追つかけて、楽しく強く

育ててくれたお陰でした。

私は麻山で死んだ母や兄がきつと私を守つてくださ

つたのだと思います。

深夜にドアをこわして侵入したソ連兵が、その夫の

目前で妻の方を銃で脅しつつ犯し夫の方にも銃口を当

てられ、助けられなかったという話も耳にしました。

「女を出せ」

の要求は日に日に強まり、次第に連れていかれる人の

数も多くなり、仕方なく金を集めて皆で出し合つ

て、職業とする女性に人身御供となつて頂いて難をの

がれました。最初に満州に侵攻して来たソ連兵の中には、囚人兵もいたと聞きましたが、本当に恐ろしかったです。自動小銃を持ち、手当たり次第に人の家に土足でねじ込み、欲する物は片っぱしから盗み、果ては女と荒し廻り私共のいた近くには、ソ連の秘密警察（ゲ・ペ・ウ）が駐留していて、悪い兵士は銃殺されたと言いますのに、一時は治安が非常に悪かったのです。ゲ・ペ・ウのいない所は、どんなにひどいありさまだったことでしょう。

昼間一緒にガリ板をすって教材を作っていた同僚が、その夜急に発熱して亡くなったので、校長からの連絡で夜の葬儀に集まりましたが、お身内の人として一人もなく奥地の義勇隊からついて来ていた生徒が、先生を奉天の凍土の中に一旦入れてから、先生の靴、服、毛布と皆次々と剥がすのです。

「かわいそうに剥がすんでない」と言いましたところ

「生きている者が着る物が無いのです」と答えました。夏衣一枚の着のみ着のまままで避難して

来て、住むに家なく着物、食物、何もなく、運よく倉庫や空家に入っても燃料もなく、金もなく、職もない、日本人の難民救済会の手によって、どれくらい援助を受けられたかわかりませんが、あの真冬日に素肌にもンペ一枚しかはいていないので、モンペの隙間から腰の肌が見え、真青な顔の婦人を見て義姉の衣類を届けました。その外にもたくさんの困窮者を見るたび義姉は、惜しみなく金を衣類を私に届けさせました。

その為にも、ソ連兵などに大切な衣類を持ち去られぬように、押入れにしっかりと納めて押入れの前に箆筒を置き押入れの物を守り、次々と放出して少しでも同胞を助けたのです。義侠心の強い義姉でした。

ある日の夜、ダダンダダンと物凄い音が夜通しあたりを響いていました。朝起きてみて吃驚いたしました。夕べ迄建っていた大きな建物が、土台石も残さず全部持ち去られて、空地になっているのです。

物資に困った満人か、あるいは怨みある建物であったのか、一夜にして蟻が皆運ぶように運び去られてしまいました。

折角次兄を頼みとして奉天まで辿り着いたのに、秋になって兄の名は電柱にはり出され賞金づきで探し出されたのです、兄の友人はうまく地下に潜りましたのに、兄は

「逃げ隠れはせぬ」

と堂々と自分から出て行つたのです。本当に馬鹿正直な兄です。自分が出頭せねば他の人に迷惑が及ぶと言つて行つてしまふ。

残された義姉は子供と私を守つて、一生懸命でした。生活のために義姉と二人で毎晩布やりボンで、美しい造花や人形をたくさん作りました、それを米兵達も来る店に並べると、いくら作つても間に合わないくらいよく売れ、価格を高くつけてもどんどん売れました。

「芸が身を助けるふしあわせ」

等と言いながら昼は学校、夜は教材研究が済んでから、深夜まで手芸をいたしました。買つて行く米兵の喜んだ顔を今も忘れません。冬になって拳銃等の取り締まりが厳しくなり兄の所持品の刃や銃等を畳の下の地下室の八畳間にかくしましたが、隅から隅まで探しまく

つてかくしているのを発見したら殺すというので、義姉は不眠を訴えるようになりました。いざという時のためにかくしていたのでした。満人が持つていそうな人にこっそりと話をして、相当に高く買つてくれるのでしたが、ある吹雪の夜かくしてあつた物を皆持ち出し、人の見ていないのを確認し凍つた川に穴をあけて、一つ一つ落して流しました。皆義姉のためと思えば少しも恐ろしくありません。草木も眠る丑満時、ボトンと落ちた拳銃の冷たさ、忘れられません。

敗戦国民には水道も停められ、ガスも出なくされ、電気も送ってくれなくなり、原始生活に戻つた感じでしたが、薪も作りローソクの灯で夜なべしました。

ある日私が学校から帰ると、家の中がごちゃごちゃに荒され、義姉が子供を抱いて泥足で歩かれた部屋に、怒つて座つていて、

「スミちゃんがいなくてよかつた。いたら連れてゆかれるところだった」

と溜め息をつきました。ちよつと子供の出入りしたすきに侵入して来て、義姉に銃を突付け引き出しとい

う引き出し全部抜いて欲しいものを盗み、口笛吹きつつ帰ったというのです。義姉は上手に壁や風呂のたき口米びつの中に、万一を考えてかくしてあったので、ソ連兵に大事な品は盗られなかったけれども、恐ろしくて恐ろしくてたまらなかつたのです。そうしているうちに春が来て、八路軍の方から戦場兵の血の付いた衣類の洗濯を各家庭に強制的に命じられました。仕方なくいやいや洗い上げました。又時々八路軍が蒋介石軍か判りませんが、物資の徴発にきました。体の弱い子供の唯一の栄養源にと僅か飼っている鶏を徴発すると言って、鶏をつかまえたのですが、私も必死の思いで「病気の子供の食べる物がなくなつて子供は死んでしまう」と訴えました。半分は日本語で、半分は中国語でしか言えませんでしたが、二人の兵隊は、子供を憐れんで鶏を返してくれたのです、どこの国にも良い人がいると思えました。

昭和二十一年六月十日、突然に婦女子のみの家庭の強制送還が開始され、帰る支度をする時間もなく、祖

国に戻らされることになりました。まだその時は親兄弟達の情報もわかりませんから、日本に帰りたいたは思いませんのに、私に中隊長になつて皆の面倒を見るようにと役が仰せ付けられました。

幼児や老人をかかえた、女ばかりの大隊が編成され、あちらこちらと歩かされ、汽車に乗せられれば夜中に汽車は、広野の真中に停められ、満人やソ連兵の物盗りがよつてたかり、ひたたくり、貴重品から子供のおしめまでとられちよつとのすきに、子供までさらつて行くのです、少しの油断も出来ず、相変わらず若い女性も連れて行ってしまうのでした。私と義姉と従兄弟の嫁とで一年生を頭に五人の幼児を一緒に連れて帰るのです、子供が便をして汚しても洗う所もなく本当に困りました。リュックサック一杯に食料と子供の着替えを少し持ち、あとは子供をおんぶする帯と五人の幼児が全財産。

義姉が盗まれずに持っていた貴金属は皆、私のパンツの股に縫い込みました。一切の物をそのままそっくり置いて帰還させられるのです。発見されたら全員裸

にして調べられると聞かされていましたが、係官は私を調べなかつたのです。高価な指環などが引揚後の義姉の生活に役立ちました。コロ島では大勢の日本人全員が地面に土下座させられて、威張った女警が、皆から時計やめぼしい品を皆取り上げて、バケツに投げ込んで持ち去りました。何日コロ島にいたのかそれが何月の何日か等は疲れ果てて何もわからないのです、目の前に日の丸の旗のついた船があつて船の中の人が迎えにきたよォと手や帽子を振っているのを見て、嬉しかった。

乗船して子供を背より降ろし安心した。今日からは女を出せも来ないし、着物を剥ぎとられる心配もない。船に酔つて目をつむっていたが夜空の涼しい星の下で、皆は次々とドラム缶に湯を入れた風呂に入った、朝が来て博多が近づくや殆どの人が甲板に出て日本の島の見えるのを待ちました。薄青く小さく見え出した島がやがて青緑になり、だんだんと近づいて来ます。

国敗れて山河あり、縁にけむる祖国の島を見て皆涙していました。祖国は何と有り難い所でしょうか、上

陸すると係官が

「貴女方はあちらでどうしていましたが、貴女方のようによい服装で帰つた人ははじめてです。皆麻袋マクタイを腰に巻いて帰りました。」

と教えられました。私は兄の背広を着て義姉も従兄弟の嫁も、ふだん着のまま幼い子を引連れて帰つてきたのですから、何もよい服装ではないのに私共より前に帰つた人は着ているものも身ぐるみ剥ぎとられ、命からがら帰つたのだと思ひました。

博多についたとたんに多勢の浮浪児が私をとり囲み、泥まみれの服、泥まみれの顔で、

「姉ちゃん何か食べる物頂戴」

と皆で空腹を訴えました、とても空腹でかわいそうなありさまでしたので、一個五円も出してやつと闇で求め甥達に与えようと思つたおにぎりを皆にわけてあげたのです。引揚者の持ち帰り金は、一人千円などとい体何のためにきめたのでしょうか、千円では家族の十日分のにぎり飯代にしかありませんでした。

それでも痩せ細つた浮浪児達は、親をなくして家も

焼け人の情けにすがって生きています。祖国でみた哀れな姿でした。

たくさんの浮浪児をみてしまいました。

北海道行きは汽車はないので、上野まで乗りますと途中の駅では和服に白い割烹着の婦人達が熱いおいしい茶を入れて下さり

「長い間ご苦労さまでした」

と丁寧に頭をさげて下さるので、ああ日本だなあと涙が出ました。広島を通った時は、行けども行けども何も彼も土と化し草一本すらなく、焼けただれた鉄の棒のようなものが一本あっただけ、原爆で命を落した人の影すらもなく、ご冥福を祈りつつ通りました。上野まで来ると腕章をつけた人が、それぞれの汽車に乗るまで案内して下さいました。駅の内外にもたくさんの浮浪児や家をなくした大人たちが、座ったり横になったりしていました。

北海道に帰っても、親兄弟もなく、叔母の家の居候になり、毎日来る日も来る日も芋の皮をむき芋を煮てつぶし、澱粉を加えて餅のようにして焼いて食べまし

た。安心と長い間の旅の疲れで、食物も何もいらなから唯眠らせて欲しいと頼み眠り続けました。どのくらい寝たか月日も時間も全くわかりません、叔母の夫は校長でしたので警察につかまる闇買を一切しないで、芋と沢庵の日ばかりでした。優しい叔母の下でも、食物のないのは辛く居候する身は尚更でした。親が残して渡満した時の土地は、農地解放で耕作者のものとなり、生産者になればびもじさから脱出が叶うと思ひ、十三人家族の中の家長の弟に嫁入りしました。家長は、妻を亡くし子供を八人抱えていて外に姑と夫の妹がおりました。

毎朝鶏より早く起き、天候によつては真夜中になつても、月の光で脱穀作業が続きます。機械化されていない時代でしたから、女は男と同じ時間農作業をした上に、炊事、洗濯、掃除、裁縫と育児で、誠に一日の休日はおろか僅かの労働賃金さえ頂かれず、繰返し訪れる大凶作収穫皆無に泣いたけれど、やがて分家し耕作面積も努力してふやし、水田の水張り面積九町四反から夫と二人で七百五十俵の優良米を出荷した秋もあ

りました。引揚げの苦勞の體驗が乗り切らせてくれました。した。

私の心から離れたことのない満州へ

一九八〇年、孤兒慰問訪中団の中に入って訪中して生き残っている孤兒達を励まし、肉親さがしの手紙が毎日のように航空便で来るようになり、昼は農家ゆえ農業をし、夜は孤兒関係の手紙の内容によつて厚生省と連絡したり探す手つだいをいたしました。そして昔の哈達河在満国民学校の校長高田成章先生も孤兒に対して、温かい心をたくさんおよせ下さり、特に困窮している孤兒に手厚くしようといつて、校長が私に今までに孤兒へとして百万円を超える援助を送つて下さり、彼等に送りました。私が送金するためには、田舎から札幌の東京銀行まで行かねば送金出来ないことを知つてから、高田校長は大阪から送つて下さるようになりしました。

人民公社にいる孤兒の生活は夫婦の年収が百五十元でした。その頃日本の一万円が六十元でした。面会にハルピン迄来てくれた孤兒の中には、八月の三十五度

の暑さの中を、細かく上手に小さい古い布をつぎ合わせ、裏布もつぎ合わせ、真夏なのに裕の服を着ていましたので尋ねますと、生活が大変なことがわかりました。清潔に洗濯されて上手につき合わせてありますが、自分の服は二枚しかなく冬になったらこの服に綿を入れ、夏になったら綿を抜いて着ているとのことでした。それは日本では考えられない生活なのを知つてより、何とか節約をして少しでも助けて上げたいとパーマ等は一度もかけず、送金を心がけていましたら、元勤めた学校の校長高田先生が、何十万円づつかを協力して下さるのです。今は大分変わってきましたが、その頃は中国の方では主任をしている人でも、月給は六十五元、若い人では三十三元ぐらいでしたから日本からの僅かの金額も、あちらでは助かったことと思ひまして、送り続けました。今では一万円が四百元ほどに変わってきております。

私も中国で見知らぬ人から助けられて今日あることを思えば、外国に残された孤兒の身がとても案じられます。国策に添って渡満した人々の最後の痛ましさを

頭から離れず、山野に屍をさらした人々に、ふりそぐ日光、赤い夕日、山の鳥、狼の群れの外に、誰が訪れ一輪の花を供え一本の線香をあげたでしょうか。

一九八三年、私達遺族は、長い間の念願が叶って、悲劇の麻山自決現場に三十九年振りに遺骨を集めに行きました。遺骨は終戦後中国の紅十字会の手によって集められ土をかぶせた土饅頭になっていると孤児達から知らされていましたが、何といっても四百六十五人の遺体です。土饅頭の上には大きな草がびっしりと生い繁り、丘全体に細い骨小さい骨が草の根にからまれて散らばっています。それを拾い集めながら、小さいのは子供のだと思うと、楽しく歌い楽しく学んだ生徒の姿が次々と浮んで、名前を呼んであげました。中国側が、私達の悲しい思い出に心から同情して下さって、実現した慰霊の旅でした。

私達は、日頃の生活費を切りつめても、訪中して供養させて頂きたい一心で、これ迄に二回麻山迄来ているのですが、中国側は、慰霊を許しませんでした。又残留孤児との面会も、政府間の孤児問題が未解決とい

う理由の下に、折角現地迄行っても、孤児との対面は許されず、孤児も私共も願いが達せられなかったのに最後の時、ようやく許されました。

終戦の時、掠奪、惨殺にあった中国で、中国政府の招待所の役人が私達を案内して下さいましたのです。三回目のお慰霊の旅の時には、中国側ですでに立派なお墓を建立して下さいましたのです。思いもよらぬことでありました。

「麻山地区日本人公墓」

です。大変大きな立派な日本式のお墓には、日本の字で、麻山地区日本人公墓と、刻まれていて、私共遺族を感じさせたのです。

未だ大陸には、日本人将兵の白骨が折り重なったまま、国境地帯の谷間に放置されている、と八面通に住む孤児からの知らせがありました。その遺骨は、永久に放置しておいてよいものでしょうか、憤りを感じずにはおられません。それなのに、三十九年振りに悲願の遺骨収集と供養が叶えられたのは、連続三年三度の訪中という私達遺族の執念からではあるが、麻山で

進退極まった時、婦女子を捨てず自ら死の道案内をした指導者、北海道大学出身の貝沼洋二団長の人柄がさせられたものでもあります。

私達の悲しい心に同情し温かい心をよせて下さった黒龍江省の方々（孫志堅さま黒龍江省外事弁公室主任）

「皆さん方遺族にとつては辛い思い出、わが省でも今後公墓の所在地の住民が、大切に墓を守っていきます。不幸な過去を乗り越えて、日本と中国は友好を一層進めましょう。」

といつて下さいました。日本が戦争に敗けた昭和二十年の時、中国の蒋介石総統が

「我々は敵国の罪なき人民に、汚辱を加えてはならない。彼等がナチスのような軍閥に愚弄され駆使されたことに対し、むしろ憐憫の意を表し、錯誤と罪悪からみずから抜け出せるようにするのみである。銘記すべきことは、暴行をもって暴行に報い、侮辱をもって彼等の誤った優越感にこたえようとするならば、憎しみが憎しみにむくい合うこととなり、争いは永遠にと

どまることがない……」

という放送を、十一分間にわたってして下さったので、蒋介石総統のおかげで、日本人は皆殺されずに、祖国に送還され今日があります。侵略戦争は、人類の知る最重刑に値するといいますが、中国民衆に残虐と凌辱を加え、彼等から、今も凶悪なる関東軍凶悪なる日本兵といつて恨み言をいわねなければならない者迄、祖国に送還し

「怨みに報ゆるに徳をもってせよ」

と二百万人もの人を助けてくれた大恩は、忘れてはならないと思うのです。

「お母さん、僕ご飯をたべさせてくれたらどんなことだつていうことをきくよ。」

と泣き泣き歩いていた子供の避難の姿。

「我是日本人オーシーリーペンレン」

と汽車にのつた私に、幼い時着ていた紺の着物の切れ端を、証拠にみせた残留孤児の切迫した懇願の瞳。

呼べど還らぬ、いとおいしい幼い教え子達。尊敬する母や兄や姉たち。どつと私をとり囲んだ、日本の浮浪

児たち。芋とたくあんばっかりの日々、恐ろしきソ連兵

凍てついた土を掘り上げ、日本人の死体を片っぱしから重ねていた奉天の校庭の穴。

ああ、戦争の傷跡は、筆舌に尽くすことは出来ない。襲った方も、襲われた方も悲劇をまき散らし、人が人を殺す罪は、永劫に許されるべきことではないと思うけれど、「兵隊さん、護衛して」と頼んだ貝沼団長に、山を迂回して一緒に行こう、と兵隊が言ってくれてたら、集団自決の惨劇はなかったのではなからうか。因縁の集まる所万物の生あり、因縁の散ずる所万物の死あり人間とは、かくも悲しいものであろうか。出征兵士の、家族であった婦女子が、兵隊からも国からも見捨てられた。日本国家の政策の犠牲者として、虜囚を拒み自決した。又自決にもれて、逃れても、祖国は遠く帰られず、苦難が続く婦人達やいまだ帰れぬ孤児達に、日本政府は、一日も早く、具体的に福音を与えてあげて下さい、戦争の愚は、繰返してはなりません。

戦死者の死を心から悼み、ご冥福をお祈り申し上げます

ます。私はこれで胸一杯の悲しみの稿を終ります。

執筆者の横顔

岩崎スミさんの両親は由仁町で篤農家であるところから、第四次拓務省移民団の実験農家に選ばれて、昭和十五年に渡満した。スミさんは一年おかれて学校を卒業し、翌十六年訓導として、在滿哈達河国民学校に赴任し、四十人の児童を相手に教壇に立ち、全員寄宿舎で、食事、入浴、就寝、洗濯等々に親子同様、それ以上の情愛にみちみちた生活をおくり、純情なスミさん教師の任務の重いこと、尊いことに誇りたかく、なお積極的に責任の重要さを胸に秘めて心身ともに健康な日本人に育てていく決意を固くして連日の努力精進の日が続く、正に志操堅固な教師であった。

昭和二十年八月六日高田成章校長の命で東安高女で音楽講習に三泊四日出張し、九日、哈達河の開拓村に帰る出発直前、ソ連軍の越境攻撃に一瞬間の間に物情騒然、民衆は右往左往中に負傷、即死で倒れる中に列車に飛び乗って哈達河に向った。

哈達河駅の話は、部落は全員避難し一人もいない

とのことで、降車を思いとどまり遙かに部落を眺め母の顔がちらちらして泣いた、牡丹江高女を訪ね初めて陛下のお言葉を聞き、忠君愛国の至情に燃えている岩崎スミさんは地に伏して号泣、一泊してハルピン経由して新京につく。

在滿教務部を訪ね、退職金を受領し、一緒にきた教員に分配してあげた、若い教員なのに責任旺盛なあつぱれの手さばきである。

ここで、哈達河のことを聴く、哈達河の部落は惨憺たる地獄と化し、前方からソ連軍の攻撃、後方から反乱軍の攻撃に遭う、死か、脱出か、何れか、万事窮す、自決と決し、貝沼団長まっ先にピストルで自害、次々と合意の殺人自決、四百六十三人は、母は子を道づれに黄泉路へ旅立った、翌日、四百六十三人の屍の下から血に染まり傷ついた七人の子供はいあがって、お母さんと連呼して泣く、それを手助けしてくれた現地満州農民がいた、その七人こそ、岩崎スミ先生の教え子とわかった、悲痛限りなく号泣し、はるかに冥福を祈り続けた。

その後、岩崎スミさんは修道士の如く、会いたい一念で訪中三回目に、その教え子とハルピン邂逅し抱きしめてともども泣いた、この執念は神に通じた、岩崎スミ訓導の姿である

(杜引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

引き揚げ後の労苦

北海道 吉田 久子

終戦の混乱の続くハルピンでのこと

夫は召集、二人の子供に死なれ、部隊解散で夫の婦りを喜んだのも束の間、元使用人の満人に連れ出されソ連兵に密告し銃殺されて夫の持ち金は全部とられてた。

もう生きる望みもなく日本の親元に遺書を書き立木で首をつつたが輪がしまるようになかったため何度輪に首を入れても失敗した首の傷を後で言われて気が